3世代時代の到来

昨年の京都・平安神宮に続き、今年は東京・明治神宮・参集殿で［スマイル・プロジェクト京都グランマ&東京コンセプト・ショー］が開催される。

東京側の主催者・3世代生活文化研究所から、［3世代をつなぐというコンセプトから、日本のファッション界を世界に牽引した森英恵さんとお孫さんの対談を冒頭に、カナディアン・アカデミー・セタガヤの（孫と留学）の活動も盛り込みたい］と、打診があった。

10年前から少子高齢化、核家族をキーワードにを開始。その実践を基にサンリオのＮＰＯハロー・ドリームの［3世代笑顔プロジェクト］立ちあげにも関わり、そのアドバイザリー・ボードの活動から多くを学ばせて戴いている。

ＮＰＯエガリテ大手前代表・古久保俊嗣さんは、元商社マンで海外勤務も多く、成熟した社会の創出は、少子高齢化、経済のソフト化、社会の多様化、社会的紐帯の希薄化が進む日本の未来を憂う熱くて冷静な分析ができる関西人。

［男2代の子育て講座]は老若男女が共同して子どもたちを育てていく社会。その担い手として元気な高齢者の智恵と能力を発揮してもらいたいと思っている。私たちはバアさんとジイさんが頑張る社会を、ババ・ジジ・ガンバル、［バジル社会］と呼ぶ。バジルは最高のハーブ。自分を主張せず、周囲の素材や旨みを最大に引き出す。それこそが高齢者の特性と信じる。［ソフリエ］にはその象徴として社会変革の起爆剤を期待している。これからも、全国各地での実施に向けた取り組みを進めてゆきたい。＊＊祖父+ソムリエ=ソフリエ

以上は古久保俊嗣さんの参加者へのメッセージだが、男女共同参画の調査研究・子育て環境ランキング調査は幅広い層から注目を集めている。また世界初の宅配型市民大学・エガリテ市民大学を開校し3世代活動を精力的に展開し、和服の出で立ちでユーモア満載の講演は笑いが絶えない。

父親も子育てに参加しようと立ち上がったＮＰＯ［ファザーリングジャパン］は、現在では地域の子育て支援に関わる男子を[イクジイ]を紹介する業務を展開している。

新宿区で［イクジイ］をする錦織恵一郎さんは、近所に住むフランス人3姉弟を通学バスの送迎場所まで見守ったり、夕方6時にお母さんが仕事で学童クラブに行けない小学生をお迎えに出向く。昼間のうちに子ども向きの本を図書館から借りてきたり、手作りの夕飯を用意したりする［イクジイ］6年のベテラン。新宿区の場合、時間800円だが錦織は笑って言う。「金額は問題ではありません。1対1で子どもと向き合えることが楽しみなんです。僕は経済活動だと思っている。お母さん方はその分、稼げるから。自分ができる範囲で、そのお手伝いをしているんです。

一方で高齢社会に向けた知恵作り本腰をいれる動きも始まっている。ジェロントロジー（老年学）に精通した東京大学教授らが千葉市郊外で実践の場を作ったり、高齢者社会検定試験を実施したが18歳から93歳の500人以上が受験。北海道から受験のため上京した70歳の女性は［社会の支え合いに貢献したい］と意欲的に語っている。

長野県で医者をしながら長野県を男女ともの長寿日本一にした鎌田實氏は、その要因を［高齢者就業率が全国一］が最も大きいと指摘する。

80歳を過ぎても、小さな農業で収入を得る。そのお金で日帰り温泉に行き、孫に小遣いをあげたりする。生きがいが生まれる。人間は作物や人間の成長を見ると［幸せホルモン］のセロトニンが出やすく、ストレスもためにくくなる。日本中が長野県のようになれば、地域が健康になり、医療費も低く抑えられる。鎌田先生は東北被災地の集会場で、長野県の実践結果の語り部ボランティアーで忙しい。

高齢期を迎える団塊世代にエールを！！！発想を切り替え、新しい高齢者像を発信できる時代がもうそこに。孫情報マガジン［孫の力］のモデルになり、孫と一緒にハイポース、幸せホルモン・セロトニン創出でパチリ！！！

谷口幸紀のウサギの日記 ― ブログより ―

上智大学中世哲学科博士課程修了。国際金融業でコメルツバンクからリーマンブラザーズへ。ローマのグレゴリアーナ大学神学修士。カトリック高松教区司祭。
著書「バンカー、そして神父」（亜紀書房）現在ローマ在住。

横山恵久子（エクコ）さんを中心に書いてみよう。

彼女は福島の南相馬市が地震、津波、放射能汚染の三重の災害に見舞われ、被災直後、食料も水も全く無くて文字通り飢餓状態に陥ったとき、最初に届いた救援物資がカリタスの食料と義捐金だったことを決して忘れることはない。空腹のとき、たった一個のおにぎりは、涙が出るほど有り難いものだったと彼女は振り返る。

だから、彼女がローマを訪れた背景の一つには、カトリック組織「カリタス」の俊敏な対応に感謝の意を表明する目的があった。

2年前に福島を訪れたカリタスの上部基金団体、バチカンのコル・ウヌム（ラテン語で「一つの心」）のトップの枢機卿と、その補佐役のモンセニョール・セグンド神父（ローマの神学院の私の2年先輩）は、二人とも南米に出張中で会えなかったが、現セグンド神父は彼女と私たちのために、現教皇フランシスコの一般謁見の特別切符を用意してくれていた。7-8万人の群衆の見守る聖ペトロ広場の正面の教皇の椅子と同じ高さのステージに設けられた特別席、教皇の姿を20メートルほどの至近距離で横から眺められる席に我々はいた。しかし、長時間炎天下での謁見は、放射線の内部被爆で健康を蝕まれている彼女の肉体には過酷なものがあった。

恵久子さんの表敬訪問を受けてくれたモンセニョール・ビーター・ダイ・ブイ神父は、彼女の幼い頃からの心のよりどころ（彼女の言葉では「神様じいちゃん」というう）の教皇ヨハネ・パウロ2世の墓前に特別な入り口から案内してくれた。棺の納まった祭壇の前に跪いて長い祈りを捧げた彼女は、「心にあったすべての思いを聖なる教皇の魂に打ち明けることが出来た」と、爽やかな顔つきだった。

彼女のローマ訪問には他にも目的があった。それは、福島第一原発の事故の真相を世界の人々に知ってもらうことだった。それで、ローマ市内で記者会見と講演会の機会が設けられた。

福島の原発事故とその放射能被害が、今現在、何も問題が解決されていない深刻な状態にあるにも関わらず、国内的にも、国際的にも忘れ去られ風化していきつつあることに対する危機感がにじみ出た切々たる訴えがそこにあった。

内部被爆（いろいろな経路から体内に取り込まれてしまった放射性物質から出る放射能による被爆）について、現在行われているホールボディーチェックがほとんど無意味であって、体の部分的なサンプルの精密な測定が必要であるのに、それが日本では行われていないこと。

国の安全宣言や避難解除が全く汚染度の実情に合っていないこと。

災害初期段階で強制避難命令以前に自主的に疎開した人々が国の支援から切り捨てられていること。

そのために経済的に行き詰った家庭の少女たちが復興特需で群がってきた労働者たちに体を売って生活を支えている悲惨な現実があること。

イタリアの支援団体の呼び寄せ枠に応えて日本の行政が送り込んだ放射能被災孤児たちの選別が不適切で、国からすでに手厚い給付金を得て全くお金に困っていない子供たちが、呼び寄せられた先で我儘勝手な行動を取り、大金を使ってブランド商品を買い漁って帰るなど、イタリアの好意を裏切り顰蹙（ひんしゅく）を買ったこと。

そういう海外の善意を受けるにふさわしい本当に困窮している内部被爆児童にはそのような支援がほとんど届かない現実があること。チェルノブイリの子供たちを20年間にわたり毎年1万2000人も呼び寄せ支援してきたイタリアの団体と、福島の内部被爆児童たちがまだうまくかみ合っていないこと。

反原発の政治的・イデオロギー的活動家としてではなく、純粋に放射能被災者の日々の生活に密着して支援とケアーに献身する人としての彼女の話は、そうしたわが身を省みない活動の結果生じた彼女自身の深刻な内部被爆の現実と共に、聴衆の心を強く捉えたと思う。

彼女の純粋に人道的な、隣人への愛の活動と、真実の訴えが、しかし、深刻な被爆の現実を隠蔽し、放射能被災者を切り捨てつつ、大国の戦略に追従し、原発輸出産業で金儲けを企む資本家、政治家の目障りになる時、彼女の発言はインターネットの世界では何者かによって執拗に消され、それでもめげずに頑張れば、ある日交通事故などで不審死するなどの恐ろしいことになること（アメリカ社会ではそんなことは日常茶飯事だ）を危惧し、そうならないことを私は切に祈る。

2年前の3.11の日以来、身の危険を顧みず、救命と遺体収容と被災者支援のためにずっと危険な高放射能汚染地域に踏みとどまって活動し続けてきた元航空自衛隊特殊部隊の彼女の肉体は、深刻な内部被爆で日々冒され続けている。その事実を承知の上で彼女と婚約した彼、その二人を愛おしく見守る母親の束の間のカプリの休日に、私はお邪魔虫として同道したというのが事の真相でありました。

MAPLE NEWS

2013年 Vol.70

気仙椿の実を製品化に成功

夢を形に

気仙椿ドリーム・プロジェクト

一般社団法人リテラ　代表・渡邉さやか

被災地、途上国で見えてきたこと

学生のころ、2ヶ月間カンボジアに自分の経験のために行ったが、それは傲慢だと気付きました。誰かにとっては非日常でも、誰かにとっては日常である、ということに気付かされたのです。

被災地の復興には、地域の産業復興を通じた経済の活性化が不可欠であり、持続可能な経済の仕組みを被災地で構築し、拡大させていく必要があるという想いから始まったプロジェクトです。そのために私たちは、ヒト・モノ・オカネにおいて、必要な場面でプロフェッショナルを投入し、地方だけでは生み出せない事業を民間のチカラで組成し、被災地での産業復興を実現させていくことが必要だと考えました。

支援するさいに心がけているとは支援される事に慣れると受け身になってしまうので、地元の人と一緒にできるビジネスを考えました。途上国支援や被災地支援はお金が入ってこないと思っていたが、やり方によっては売り上げを出しながら、被災地や途上国の人たちを元気にしていくビジネスを行うことができるのだと改めて認識することができました。

精油の技術を持ち、震災後家も自宅も跡継ぎの息子さんも亡くされた石川さんと、その技術を受け継いでいる障碍者授産施設である青松館、そして被災地の自治体の協力も始まりました。商品開発には、ハリウッド化粧品、En女医会が協力をして下さり、ついに気仙椿油を使った［気仙椿ハンドクリーム］と［気仙椿リップ・クリーム］が出来上がりました。

地域の人々で集めた［気仙椿の種］から、気仙地域の自然と産業を礎とした事業を創出し、未来の子供たちに繋げるための3世代プロジェクトです。被災地で閉塞感が漂う日本を憂う、多くの海外からの老若男女の日系人と御会いしました。既にジャパン・ソサイエティからの援助も受けておりますが、今後は海外の日系人の団体ともコラボし、［気仙椿ドリーム・プロジェクト］を展開して行きたいと思っております。

ENGLISH JAPANESE STUDIES
CANADIAN ACADEMY SETAGAYA
4-20-13-213 NOZAWA SETAGAYA-KU, TOKYO, 154-0003, JAPAN TEL:03-5712-3670
BRANCH:ENGLAND,CANADA,NEWZEALAND FAX:03-5712-3671